

いまミナマタを学ぶ意味とは 国内外の大学生が現地で研修

有料記事

編集委員・石井徹 2024年9月12日 16時00分

水俣病の公式確認から68年たった今夏、国内外の大学生が、熊本県水俣市をフィールドワークで訪れた。学生たちは地域住民らと交流を重ねながら、公害の原点である水俣の過去や現在を学び、水俣の未来について自分事として考えた。

フィールドワークには、慶応大学とインドネシア、ベトナム、マレーシアなどの大学から13人が参加。課題解決のための国際感覚などを身につけるEBA（エビデンス・ベースド・アプローチ）プログラムの一環だ。

8月初めに現地入りした一行は、まず水俣市立水俣資料館と環境省の水俣情報センターで、水俣病の歴史や水銀汚染のメカニズムなどを学んだ後、水俣病の被害者から通訳を介して話を聞いた。



植原教授の説明を聞きながら水俣病に関する展示を見学する学生たち=2024年8月4日、水俣市立水俣病資料館 

「人々はなぜ水銀に汚染された魚を食べ続けたのですか?」。参加者からはそんな質問も出た。

「漁師は岸から離れたきれいな海で捕れた魚が、まさか汚染されているとは思わなかったのです」。漁業や農業の傍ら水俣病の語り部を務める杉本肇さん(63)が答えた。家族が水俣病による健康被害や差別によって味わった苦悩や地域の再生についても語った。



水俣病被害者の杉本肇さんの話を聞く学生たち=2024年8月4日、熊本県水俣市 

海外を含む大学生に語る意義について、杉本さんは「ほかの地域の人たちに水俣病の本質を知ってもらうことで、環境破壊がもたらす差別を含めた被害を防ぐ手立てになることを願っている」と話した。

一行は現地に4日間滞在し、ごみ削減やリサイクルなど環境への取り組み、地域再生について学び、豊かな自然に触れた。地元高校生とのワークショップも開いた。

インドネシアから参加した学生は「ネットでミナマタを検索すると、悲惨な歴史しか出てこないが、このまちにはたくさんの可能性があることを知った」と言う。慶応大4年の川上義馬さんは「被害者もこのまちを愛していることに希望を感じた。私たち若い世代は過去の間違いを学ぶことで同じ過ちを避けなければならない」と話す。マレーシアからの参加者は「私たちはソーシャルメディアの時代に生きている。もし、いま同じことが起きたら、通信技術を生かして、どう早く対処し、被害を食い止めることができるのか、についても考える必要がある」と述べた。

8月終わりに開かれたネットでの報告会には、すでに帰国した学生たちが本国から参加した。「自然や公害の歴史を生かしたエコツーリズムやスタディーツアーに力を入れる」「インフルエンサーと協力してデジタル発信に力を入れるのはどうか」……。学生たちからは水俣再生のための様々なアイデアが示されるとともに、資料館に英語表記が少ないなど外国人受け入れのためのインフラ不足などが指摘された。



植原教授の説明を聞きながら水俣病関連の展示を見学する学生たち=2024年8月4日、水俣市立水俣病資料館 

担当した植原啓介・慶応大教授は「現在の危機は、一国だけでは解決できない問題が多い。アジア各国の学生が参加するフィールドワークを通して多様性を認識し、公害の原点を訪れることで、悲劇を繰り返さないために自分たちには何ができるかを考えるきっかけにしてほしい」と語る。

国際チームによる水俣訪問は、環境事務次官から慶応大学教授になった小林光さんが10年ほど前に始めた。「生態系には分からないことがいっぱいあり、いつしっぺ返しに遭うか分からない。自然には謙虚に接し、被害に至ったら真摯(しんし)に修復に取り組むべきことを学び取ってほしい」と考えたからだ。

今年5月には、患者団体と伊藤新太郎環境相との懇談中、環境省職員が発言していた患者側のマイクの音を切った。長い年月が経過する中で、国や社会の水俣病に対する認識の薄れが指摘された。

フィールドワーク参加者の中には、帰国後、行政職員などになるような学生もいたという。環境省時代に100回以上現地を訪ねた小林さんは、「早い時期に現場に触れることは、行政職員としての栄養になるだろう」と話している。(編集委員・石井徹)

この記事を書いた人

石井 徹
編集委員

+ フォロー

専門・関心分野

環境、エネルギー

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.